



Red Hat Satellite 6.10

リリースノート

Red Hat Satellite の製品情報、新機能、および既知の問題

Red Hat Satellite 6.10 リリースノート

Red Hat Satellite の製品情報、新機能、および既知の問題

Red Hat Satellite Documentation Team

satellite-doc-list@redhat.com

法律上の通知

Copyright © 2023 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

本書では、Red Hat Satellite 向けの製品情報、新機能および既知の問題を説明します。

目次

第1章 概要	3
1.1. SATELLITE 6 コンポーネントバージョン	3
1.2. RED HAT SATELLITE および PROXY SERVER のライフサイクル	3
1.3. RED HAT SATELLITE のよくある質問 (FAQ)	3
第2章 コンテンツ配信ネットワーク (CDN) のリポジトリ	4
2.1. RED HAT SATELLITE、CAPSULE、および MAINTENANCE	4
2.2. RED HAT SATELLITE TOOLS	4
第3章 ドキュメントセットの重要な変更	7
第4章 テクノロジープレビュー機能	8
第5章 リリースの情報	9
5.1. 主な変更点	9
5.2. 機能拡張	11
5.3. 既知の問題	12
5.4. 非推奨の機能	14
5.5. 削除された機能	14

第1章 概要

Red Hat Satellite は、物理環境、仮想環境、およびクラウド環境でのシステムのデプロイ、設定、および保守を可能にするシステム管理ソリューションです。Satellite では、一元化された単一のツールを使用して複数の Red Hat Enterprise Linux デプロイメントのプロビジョニング、リモート管理、監視が可能です。

Red Hat Satellite Server は、Red Hat カスタマーポータルおよびその他のソースからのコンテンツを同期し、詳細なライフサイクル管理、ユーザーおよびグループのロールベースのアクセス制御、サブスクリプションの統合管理、高度な GUI、CLI、または API アクセスを含む機能を提供します。

Red Hat Satellite Capsule Server は、Red Hat Satellite Server のコンテンツをミラーリングして、さまざまな地理的なロケーションにコンテンツを共有します。ホストシステムは中央 Satellite Server からではなくローカルの Capsule Server からコンテンツおよび設定をプルできます。また、Capsule Server は Puppet マスター、DHCP、DNS、TFTP などのローカライズされたサービスも提供します。Capsule Server を使用すると、環境内でマネージドシステムの数が増えたときに Red Hat Satellite を簡単にスケーリングできます。

1.1. SATELLITE 6 コンポーネントバージョン

Red Hat Satellite は、複数のアップストリームプロジェクトの組み合わせです。含まれるメジャープロジェクトと、Red Hat Satellite の各メジャーおよびマイナーリリースに含まれるプロジェクトのバージョンの詳細については、[Satellite 6 Component Versions](#) を参照してください。

1.2. RED HAT SATELLITE および PROXY SERVER のライフサイクル

Red Hat Network Satellite と Red Hat Satellite のライフサイクルフェーズの概要および本製品のサポート状況については、[Red Hat Satellite および Proxy Server のライフサイクル](#) を参照してください。

1.3. RED HAT SATELLITE のよくある質問 (FAQ)

Red Hat Satellite 6 に関する FAQ のリストについては、[Red Hat Satellite 6 FAQ](#) を参照してください。

第2章 コンテンツ配信ネットワーク (CDN) のリポジトリ

このセクションでは Red Hat Satellite のインストールに必要なリポジトリについて説明します。

Red Hat Satellite は、コンテンツ配信ネットワーク (CDN) からインストールすることができます。CDN からインストールするには、オペレーティングシステムのバージョンとバリエーションに合った正しいリポジトリを使用するように **subscription-manager** を設定します。

CDN リポジトリを有効化するには、以下のコマンドを実行します。

```
# subscription-manager repos --enable=reponame
```

CDN リポジトリを無効化するには、以下のコマンドを実行します。

```
# subscription-manager repos --disable=reponame
```

以下のセクションでは、Red Hat Satellite で必要なリポジトリについて説明します。このドキュメントでは、パッケージのインストールに必要な場合にリポジトリを有効にする手順を説明します。

2.1. RED HAT SATELLITE、CAPSULE、および MAINTENANCE

以下の表は、Satellite Server、Capsule Server、および Satellite Maintenance のリポジトリリストです。

表2.1 Red Hat Satellite、Capsule、および Maintenance

リポジトリ名	リポジトリラベル
Red Hat Satellite 6(RHEL 7 Server 用)(RPM)	rhel-server-7-satellite-6.10-rpms
Red Hat Satellite 6(RHEL 7 Server 用)(ISO)	rhel-server-7-satellite-6.10-isos
Red Hat Satellite Capsule 6(RHEL 7 Server 用)(RPM)	rhel-server-7-satellite-capsule-6.10-rpms
Red Hat Satellite Maintenance 6 (RHEL 7 Server 用)(RPM)	rhel-7-server-satellite-maintenance-6-rpms

2.2. RED HAT SATELLITE TOOLS

以下の表は、Red Hat Satellite Tools のリポジトリリストです。

表2.2 Red Hat Satellite Tools for Red Hat Enterprise Linux 6

リポジトリ名	リポジトリラベル
Red Hat Satellite Tools 6(RHEL 6 Desktop 用)(RPM)	rhel-6-desktop-satellite-tools-6.10-rpms
Red Hat Satellite Tools 6(RHEL 6 Server 用)(RPM)	rhel-6-server-els-satellite-tools-6.10-rpms

リポジトリ名	リポジトリラベル
Red Hat Satellite Tools 6(RHEL 6 Workstation 用) (RPM)	rhel-6-workstation-satellite-tools-6.10-rpms
Red Hat Satellite Tools 6(RHEL 6 for System Z 用) (RPM)	rhel-6-for-system-z-satellite-tools-6.10-rpms
Red Hat Satellite Tools 6(RHEL 6 for IBM Power 用) (RPM)	rhel-6-for-power-satellite-tools-6.10-rpms
Red Hat Satellite Tools 6(RHEL 6 for Scientific Computing 用)(RPM)	rhel-6-for-hpc-node-satellite-tools-6.10-rpms

表2.3 Red Hat Satellite Tools for Red Hat Enterprise Linux 7

リポジトリ名	リポジトリラベル
Red Hat Satellite Tools 6(RHEL 7 Desktop 用)(RPM)	rhel-7-desktop-satellite-tools-6.10-rpms
Red Hat Satellite Tools 6(RHEL 7 Server 用)(RPM)	rhel-7-server-satellite-tools-6.10-rpms
Red Hat Satellite Tools 6(RHEL 7 Workstation 用) (RPM)	rhel-7-workstation-satellite-tools-6.10-rpms
Red Hat Satellite Tools 6(RHEL 7 for System Z 用) (RPM)	rhel-7-for-system-z-satellite-tools-6.10-rpms
Red Hat Satellite Tools 6(RHEL 7 for IBM Power 用) (RPM)	rhel-7-for-power-satellite-tools-6.10-rpms
Red Hat Satellite Tools 6(RHEL 7 for Scientific Computing 用)(RPM)	rhel-7-for-hpc-node-satellite-tools-6.10-rpms
Red Hat Satellite Tools 6(RHEL 7 for IBM Power LE 用)(RPM)	rhel-7-for-power-le-satellite-tools-6.10-rpms

表2.4 Red Hat Satellite Tools for Red Hat Enterprise Linux 8

リポジトリ名	リポジトリラベル
Red Hat Satellite Tools 6 (RHEL 8 s390x 用) (RPM)	satellite-tools-6.10-for-rhel-8-s390x-rpms
Red Hat Satellite Tools 6 (RHEL 8 ppc64le 用) (RPM)	satellite-tools-6.10-for-rhel-8-ppc64le-rpms

リポジトリ名	リポジトリラベル
Red Hat Satellite Tools 6 for RHEL 8 x86_64 (RPM)	satellite-tools-6.10-for-rhel-8-x86_64-rpms
Red Hat Satellite Tools 6 (RHEL 8 aarch64 用) (RPM)	satellite-tools-6.10-for-rhel-8-aarch64-rpms

第3章 ドキュメントセットの重要な変更

今回のリリースでは、Red Hat Satellite のドキュメントセットに、以下に示す変更が加えられました。

監視ガイド

監視ガイドは、将来のバージョン用に更新されている間、Red Hat Satellite のドキュメントセットから一時的に削除されました。

Conscious Language Initiative (コンシャスランゲージイニシアチブ)

Red Hat では、コード、ドキュメント、Web プロパティにおける配慮に欠ける用語の置き換えに取り組んでいます。まずは、マスター (master)、スレーブ (slave)、ブラックリスト (blacklist)、ホワイトリスト (whitelist) の 4 つの用語の置き換えから始めます。この取り組みは膨大な作業を要するため、今後の複数のリリースで段階的に用語の置き換えを実施して参ります。詳細は、[弊社の CTO、Chris Wright のメッセージ](#) を参照してください。

第4章 テクノロジープレビュー機能



重要

テクノロジープレビュー機能は、Red Hat の実稼働サービスレベルアグリーメント (SLA) でサポートされておらず、機能的に完全でない可能性があります。Red Hat は、実稼働環境での使用は推奨していません。これらの機能により、近日発表予定の製品機能をリリースに先駆けてご提供でき、お客様は開発プロセス時に機能をテストして、フィードバックをお寄せいただくことができます。詳細は、[テクノロジープレビュー機能のサポート範囲](#) を参照してください。

以下の機能は、Red Hat Satellite のテクノロジープレビューとして利用できます。

OVAL / CVE レポート作成サポート

Satellite に、Red Hat が提供する OVAL 標準データフィードを使用して、システムの脆弱性をスキャンする機能が追加されました。

foreman_openscap に、OVAL oscap スキャンをトリガーするために使用する OVAL コンテンツをアップロードするための API が含まれています。結果は CVE に対して解析され、Satellite に送信され、マネージドホストとそれに影響を与える CVE のレポートを生成します。

Container-native Virtualization Plug-in

Container-Native Virtualization を使用した仮想マシンのプロビジョニング

カーネル実行 (kexec) テンプレート

PXE なしの起動方法が含まれるカーネル実行テンプレートです。

第5章 リリースの情報

本リリースノートには主に、今回リリースされた Red Hat Satellite 6 のデプロイメント時に考慮すべきテクノロジープレビューの項目、推奨事項、既知の問題、非推奨となった機能について記載します。この Red Hat Satellite 6 リリースのサポートライフサイクル中にリリースされた更新に関する注記は、それぞれの更新に付属するアドバイザリーテキストに表示されます。

5.1. 主な変更点

このリリースの Red Hat Satellite 6 には、次の主要な変更が含まれています。

レジストリーおよびポートの変更

以前は、Satellite サーバーはポート 5000 とポート 443 の 2 つのレジストリーを使用していました。6.10 では、ポート 5000 のレジストリーが使用されなくなりました。ポート 443 で使用されるレジストリーは、引き続き Satellite と Capsule の両方に適用されます。

サポートされるポートおよびファイアウォール要件の完全なリストについては、以下を参照してください。

- [Installing Satellite Server from a Connected Network](#) の [Ports and Firewalls Requirements](#)
- [Installing Satellite Server from a Disconnected Network](#) の [Ports and Firewalls Requirements](#)
- [Installing Capsule Server](#) の [Ports and Firewalls Requirements](#)

Pulp 2 から Pulp 3 への変更

Satellite 6.10 では Pulp 2 が Pulp 3 に置き換えられています。Satellite を 6.9 から 6.10 にアップグレードすると Pulp コンテンツも移行されますが、これには時間がかかる場合があります。 [Preparing to Migrate Content to Pulp 3](#) では、Pulp コンテンツを Pulp 2 から Pulp 3 に事前に移行して、アップグレード前に時間を節約する手順が記載されています。

コマンドラインインターフェイス (CLI) の変更

Satellite 6.10 は、コンテンツ管理バックエンドを Pulp-2 から Pulp-3 にアップグレードします。新しい CLI では、コンテンツのエクスポートおよびインポートがサポートされるようになりました。これは、エアギャップ切断された Satellite 環境をサポートするためによく使用されます。

新規 CLI へのマッピング

このリリースの CLI 更新により、Satellite 6.10 でのエクスポートおよびインポートは CDN 形式ではなくなるため、Satellite 6.10 と Satellite 6.9 以前ではエクスポートとインポートに互換性がなくなります。新規 CLI を使用するには、すべてのサーバーで同じバージョンの Satellite を実行する必要があります。エクスポートされたコンテンツを同期する場合は、同等のインポートを使用する必要があります。

export-default コマンドおよび **export-legacy** コマンドは利用できなくなったため、これらのコマンドをシミュレートするエクスポートコマンドがあります。

以下の表では、利用可能なエクスポートコマンドおよびインポートコマンドをマッピングしています。

表5.1 エクスポートコマンド

コマンド	Sat 6.9 以前	Sat 6.10 以降
------	------------	-------------

コマンド	Sat 6.9 以前	Sat 6.10 以降
コンテンツビューバージョンの完全なエクスポート	hammer content-view version export --id=<version-id> hammer content-view version export-legacy --id=<version-id>	hammer content-export complete version --id=<version-id>
コンテンツビューバージョンの段階的エクスポート	* hammer content-view version export-legacy --id=<version-id> --since=<date>	* hammer content-export incremental version --id=<version-id>
リポジトリの完全なエクスポート	hammer repository export --id=<repository id>	hammer content-export complete repository --id=<repository-id>
リポジトリの段階的エクスポート	hammer repository export --id=<repository id> --since=<date>	hammer content-export incremental repository --id=<repository-id>
組織のデフォルトコンテンツビューバージョン (ライブラリー) の完全なエクスポート	該当なし	hammer content-export complete library --organization-id=<org id>
組織のデフォルトのコンテンツビューバージョン (ライブラリー) の段階的エクスポート	該当なし	hammer content-export incremental library --organization-id=<org-id>
全組織にわたる全コンテンツの完全なエクスポート	hammer content-view version export-default	該当なし

表5.2 インポートコマンド

コマンド	Sat 6.9 以前	Sat 6.10 以降
コンテンツビューバージョンをインポートします。	hammer content-view version import --export-tar=<...> --organization-id=<organization-id>	hammer content-import version --path=<path> --organization-id=<organization-id>
リポジトリをのインポート	該当なし (同期のみ可能)	hammer content-import repository --path=<path> --organization-id=<organization-id>
ライブラリーバージョンのインポート	該当なし	hammer content-import library --path=<path> --organization-id=<organization-id>

5.2. 機能拡張

Red Hat Satellite 6 の本リリースには以下の拡張機能が含まれます。

Azure GovCloud をサポートする機能

分離された環境向けの Azure GovCloud を使用したクライアント管理のサポートが追加されました。

Satellite のエアギャップと切断

Satellite は、切断された環境のユーザーをサポートするためのコマンドラインユーティリティを提供します。通常、これには、インターネットに接続されたサイトの Satellite と、インターネットに接続されていない切断されたサイトの Satellite が含まれます。

Satellite 6.10 には、接続されたサイトから切断されたサイトにコンテンツを移動することをサポートする新しいコマンドラインが提供されます。新しいインターフェイスは、以前のサポートから複数の機能拡張および改良点を提供します。新しいコマンドラインは引き続き Satellite からコンテンツをエクスポートし、別の Satellite にインポートする機能を提供します。

コンテンツをエクスポートする場合は、ライブラリー、コンテンツビューバージョン、または単一のリポジトリを、完全または段階的にエクスポートできます。**incremental** オプションは、以前にエクスポートされていないコンテンツのみをエクスポートします。さらに、コンテンツを1つのファイルまたは制限されたサイズの複数のファイルにエクスポートすることもできます。

コンテンツをインポートする場合、CLI は、エクスポートしたコンテンツに基づいて、不足しているリソースや関連付けも作成します。これには、リポジトリおよびコンテンツビューの作成が含まれます。

接続済みの Satellite で同期のみの Ansible コレクションの公開

Satellite 6.10 では、ネットワーク接続のない環境で Ansible Collections の管理が導入されました。ここでは、Red Hat Automation Hub もデプロイされます。

このデプロイメント設定では、接続されたサイトと切断サイトの両方が存在します。両方のサイトに Satellite と Automation Hub がデプロイされている。接続しているサイトにはインターネット接続があり、切断されたサイトにはありません。

Satellite Ansible Collections のサポートにより、接続されたサイトのユーザーが、そのサイトの Automation Hub を参照するリポジトリを作成できます。その後、コレクションをこのリポジトリに同期できます。同期したら、Satellite コマンドラインインターフェイスを使用して、オフラインのサイトに取得できる形式でコンテンツをエクスポートします。切断されたサイトで Satellite コマンドラインインターフェイスを使用して、コンテンツを切断された Satellite にインポートします。切断されたサイトの Automation Hub は、コンテンツを使用できます。

foreman_webhooks が foreman_hooks に置き換え

Satellite 6.10 は foreman_hooks プラグインを foreman_webhooks に置き換えられ、API を使用した Satellite への外部システムとの統合を簡素化します。Satellite で特定のイベントが発生すると、ユーザー定義の Webhook がトリガーされます。たとえば、Webhook を使用して、ホストのプロビジョニングの完了時に Ansible Automation Platform (AAP) インベントリにデータを入力するか、Satellite でリポジトリを同期した後に AAP で Ansible ジョブをトリガーします。

Personal Access Tokens

Personal Access Tokens は、以前のバージョンの Satellite で導入される認証の手段です。このリリースでは、新しい UI が追加されたため、PAT を簡単に作成したり、期限切れにしたり、最後の使用時間を監視したりできます。UI は、Personal Access Tokens タブでアカウント設定で確認できます。

Playbook の署名

Satellite 6.10 から、console.redhat.com から発信される修復 Playbook には、実行前に Satellite で検証される追加の署名が含まれます。署名が無効な場合は、修復は実行されません。これにより、セキュリティ層が追加されます。

Satellite Convert2RHEL サポート

Satellite は、サポート対象バージョンの Red Hat Enterprise Linux に変換する Red Hat Enterprise Linux 以外のホストの Convert2RHEL 操作を自動化するためのサポートを追加します。

Satellite 6.10 Server は Satellite 6.9 Capsule と連携

Satellite 6.10 は Satellite 6.9 Capsules と連携できます。ただし、最適なパフォーマンスとスケーリングを行うために、できるだけ早期に Capsule をアップグレードすることが推奨されます。

登録したシステムを視覚的に表示し、Insights と同期する機能

Satellite には、ホストの登録時および Red Hat Insights との同期時を表示するためのユーザーインターフェイスインジケーターが含まれるようになりました。

Pulp タイムアウトを設定する機能

Satellite では、タイムアウトする前にコンテンツの同期中に URL への接続を保持する期間を定義することができるようになりました。コンテンツの同期中にユーザーがタイムアウトエラーが発生した場合には、リモートリソースの可用性に合わせて、設定でこの値を増やすことができます。値を高く設定しすぎると、リモートリソースが接続を解放していないことを Satellite が自動的に検出できなくなる可能性があります。これが発生すると、同期にはかなり時間がかかる場合があります。

Red Hat Insights プラグインの削除

Insightsメニューオプションで利用可能だった機能が Hosts > All Hosts ユーザーインターフェイスに直接統合され、Satellite で管理されているホストのアクションの推奨と修正のエクスペリエンスが統合されました。

アップグレード前のチェックの一部として必要なパッケージがインストールされているかどうかを確認する機能

Satellite は、アップグレード前のチェック時に、**satellite** パッケージまたは **satellite-capsule** パッケージがサーバーに存在するかどうかを確認できるようになりました。

インストーラーの実行時に環境変数の設定を解除する機能

Satellite は、インストールプロセスの期間、インストーラー環境で **http_proxy** 環境変数の設定を解除するようになりました。

データベースからタスクをクリーンアップする際にバックアップをオンまたはオフにする機能

Satellite はデフォルトでタスクをバックアップしなくなりました。**satellite-installer --foreman-plugin-tasks-backup** を **true** または **false** に設定して、タスクバックアップを有効または無効にできるようにしました。



注記

アップグレードの場合、タスクのバックアップはデフォルトで有効になっています。以下のコマンドを使用して、タスクのバックアップを無効にできます。

```
# satellite-installer --foreman-plugin-tasks-backup false
```

ホスト登録の高度なオプション

Hosts > Register Host にある Satellite ユーザーインターフェイスでは、ホスト登録コマンドの詳細な設定が可能になり、継承された値が表示されるようになりました。

5.3. 既知の問題

現時点で Red Hat Satellite 6 の既知の問題は以下のとおりです。

Satellite Web UI で検出されたホストをプロビジョニングするときに、ホストグループからの情報が完全に継承されない

検出されたホストをプロビジョニングするときに、ホストグループを選択してホストエントリーをカスタマイズしようとする、多くの重要な情報が失われます。これにより、デプロイの試行が失敗します。

回避策として、次のいずれかのアクションを実行してください。

- hammer を使用してホストをプロビジョニングします。

```
# hammer discovery provision --name discovered_host_name \
--hostgroup-id your_hostgroup_id \
--organization-id your_organization_id \
--location-id your_location_id \
--new-name new_host_name \
--build true
```

詳細は、[Hammer CLI ガイド](#) の [hammer discovery provision](#) を参照してください。

- 検出ルールを設定し、自動プロビジョニングを有効にして、検出されたホストをプロビジョニングするために手動で介入する必要がないようにします。詳細は、[プロビジョニングガイド](#) の [Discovery ルールの作成](#) を参照してください。

BZ#(2069324)

Pulp 移行および今後の RHEL のアップグレードに関する考慮事項

[Upgrading and Updating Red Hat Satellite](#) ガイドの [Upgrade paths](#) を参照してください。

OSPP が適用された RHEL8 システムは、Satellite 6.5 から `katello-ca_consumer` パッケージをインストールすることができません。

プロビジョニング中に OSPP セキュリティポリシーを Red Hat Enterprise Linux 8 システムに適用すると、Satellite Server から `katello-ca-consumer` パッケージをインストールできません。したがって、システムはコンテンツホストとして登録できません。回避策として、システムのプロビジョニング後に、以下のコマンドを使用して `katello-ca-consumer` をインストールしてから、システムを手動で登録します。

```
# rpm -Uvh --nodigest --nofiledigest http://satellite.example.com/pub/katello-ca-consumer-latest.noarch.rpm
```

BZ#1713401

リポジトリの同期時の Pulp 3 ワーカーによるメモリー使用の強化

リポジトリの同期中に、Pulp 2 ワーカーと比較すると、Pulp 3 ワーカーよりもメモリーの使用量が上がります。その結果、複数の大きなリポジトリを同時に同期すると、メモリー不足または大量のスワッピングが発生する可能性があります。

BZ#1994397

Pulp - HTTPS プロキシセットを使用したリポジトリの同期が警告で終了する

HTTPS プロキシセットでリポジトリを同期すると、警告 **Katello::Errors::Pulp3 Error Only HTTP proxies are supported** が発生します。回避策として、HTTP CONNECT メソッドを使用して HTTPS にアップグレードしたプレーン HTTP プロキシまたは HTTP プロキシを使用します。

BZ#1993917

コンテンツビューのプロモーションのパフォーマンス

大規模なリポジトリでのフィルターでコンテンツビューをプロモートすると、Pulp 2 より長い時間がかかることがあります。

BZ#1995232

5.4. 非推奨の機能

本項には、サポートされなくなった機能、または今後のリリースでサポートされなくなる予定の機能について記載します。

Foreman フック

Foreman フック機能は非推奨となり、今後のリリースで削除される予定です。この機能は、新しい Foreman Webhooks 機能に置き換えられます。ドキュメントはリリース時に提供されます。

Red Hat Virtualization でのプロビジョニング

Red Hat Virtualization (RHV) と Satellite の統合は非推奨となり、将来のリリースでは削除される予定です。RHV タイプの既存のコンピューティングリソースはすべて削除され、RHV に関連付けられているホストは切断されます。

environment_id パラメーター

API でのコンテンツビューのプロモートするための **environment_id** パラメーターが非推奨になりました。新しい **environment_ids** はこれを置き換えます。

Bootstrap.py

ホストの Satellite Server または Capsule Server への登録に **bootstrap.py** スクリプトを使用しましたが、グローバル登録テンプレートで作成した **curl** コマンドが使用されるようになりました。

katello-agent

Katello-agent はこのバージョンでは非推奨となり、次のリリースで削除予定です。ワークロードでリモート実行機能が使用されるように移行してください。

katello-ca-consumer パッケージ

katello-ca-consumer パッケージは今回のバージョンで非推奨となり、今後のリリースで削除される予定です。グローバル登録テンプレートを使用したホストの Satellite への登録

Puppet 実行 API

apidoc でビルドされる Puppet 実行 API エンドポイント **/api/hosts/:id/puppetrun** および CLI コマンドが今回の Satellite バージョンで非推奨になります。次のバージョンで削除される予定です。

CDN のコンテンツ ISO

Satellite Server へのインポート用に redhat.com でホストされていたコンテンツ ISO は非推奨となり、次の Satellite のバージョンで削除される予定です。同期したコンテンツのエクスポートおよびインポートは、Satellite 6.10 の一部として改善されました。Red Hat は、コンテンツ ISO の代わりに使用することを推奨します。

5.5. 削除された機能

RHEV API V3

RHEV API v3 は Satellite 6.9 で非推奨になりました。本バージョンの Satellite で削除されました。

pulp-puppet-module ビルダー

Puppet コンテンツ管理および **pulp-puppet-module** ビルダーは Satellite 6.9 で非推奨になりました。Satellite の本バージョンで削除されました。同期された既存の Puppet リポジトリは Satellite から削除されます。Satellite 6.10 へのアップグレード時に、以下のいずれかの条件が満たされると、Puppet リポジトリが削除されます。

- ライブラリーライフサイクル環境に Puppet リポジトリがある場合。

- 非公開のコンテンツビューに Puppet リポジトリがある場合。詳細は、[What will happen to Puppet content on Satellite server after upgrade to Satellite 6.10?](#) を参照してください。

OSTree および Puppet のコンテンツタイプ

以下の OSTree および Puppet コンテンツタイプの管理操作は Satellite 6.9 で非推奨となり、このバージョンの Satellite で削除されています。

- OSTree リポジトリおよび Puppet リポジトリを作成する。
- OSTree リポジトリおよび Puppet リポジトリを同期する。
- OSTree および Puppet コンテンツタイプのリポジトリをコンテンツビューに追加する。
- ライフサイクル環境全体で、OSTree および Puppet コンテンツタイプのリポジトリを含むコンテンツビューを公開およびプロモートする。

Delta RPM (drpm) のサポート

Delta RPM (drpm) のサポートは、Satellite 6.9 で非推奨になりました。本バージョンの Satellite で削除されました。

Red Hat Access Insights プラグイン

Red Hat Access Insights プラグインは、Satellite 6.9 で非推奨になりました。本バージョンの Satellite で削除されました。

リポジトリのバックグラウンドダウンロードポリシー

本リリースでは、Download Policy = Background を設定するオプションが削除されました。この設定を使用すると、アップグレードプロセスでこれらのリポジトリを Download Policy = Immediate に更新します。その結果、リポジトリの同期に時間がかかる場合があります。これは、すべてのコンテンツがダウンロードされるまで同期が完了したとみなされないためです。

Foreman フック

Foreman フック機能は Satellite 6.9 で非推奨になりました。本バージョンの Satellite で削除されました。

汎用およびホストのブートディスク

汎用およびホストのブートディスクは Satellite 6.9 で非推奨になりました。これらは、このバージョンの Satellite で削除され、UI と CLI の両方で無効になっています。SYSLINUX/Grub2 ブートローダーをベースとしており、すべての RHEL 認定ハードウェアで機能する Full Host Bootdisk を使用します。VMWare の自動ブートディスク割り当て機能も Full Host Disk を使用するようになりました。

hammer content-view version export および hammer content-view export-legacy

Satellite Air Gapped および Disconnected の機能拡張の一環として、コマンドの削除など、Satellite コマンドラインインターフェイスに変更が加えられています。

削除されたコマンドは次のとおりです。

- **hammer content-view version export**
Satellite 6.10 では、このコマンドは **hammer content-export complete version** と **hammer content-export incremental version** に置き換えられました。
- **hammer content-view version export-legacy**
Satellite 6.10 で、このコマンドは削除されました。

このコマンドに代わる、同じ形式でエクスポートされたコンテンツを生成するコマンドはありません。ただし、コマンドラインを使用すると、Satellite からコンテンツをエクスポートし、別の Satellite にインポートされます。Satellite 6.10 が提供する機能の詳細は、[Satellite Server 間でのコンテンツ同期](#) を参照してください。

MongoDB

Satellite 6.10 では、Pulp 2 が Pulp 3 にアップグレードされ、その結果、MongoDB が Satellite から削除され、PostgreSQL が採用されました。

Squid

Squid は Pulp 3 のコンポーネントである pulpcore-content の一部として提供されているため、Satellite 6.10 で非推奨となり、アンインストールされました。

汎用およびホストの起動ディスク

汎用およびホストのブートディスクは UI と CLI の両方で削除され、無効になっています。代わりに、**SYSLINUX/Grub2** ブートローダーをベースとし、すべての RHEL 認定ハードウェアで機能する **Full Host Bootdisk** が使用されます。さらに、VMWare 自動起動ディスクも **Full Host Bootdisk** を使用するようになりました。